

孫への手紙——私の戦争体験——

斉藤 洋子

若宮三丁目

千尋ちゃん、先日は電話を有難う。あなたから頼まれた宿題の戦争の話、おばあちゃんが思い出したことを書いたので参考にして下さい。

昭和十九年七月に、おじいちゃんに召集令状（この通知が来ると、どんな事があっても軍隊に入らなければなりませんでした）が来て、おじいちゃんは本籍のある北海道の軍隊へ行き、おじいちゃんの両親と私と三人でこの家におりました。

その年の七月にはサイパン島でおじいちゃんの兄が戦死、十一月にはおばあちゃんの弟がビルマで戦死しました。その頃からポツポツ空襲が激しくなりました。食べる物は全部配給制度になり、とてもたりませんでした。着るものも衣料切符がないと買えませんでした。また牛肉や豚肉は勿論のこと、とり肉も全く配給がありませんでした。それは戦争をしてくれる兵隊さんに食べてもらうために、軍隊の食糧になってしまったからです。魚屋さん、八百屋さんは配給の時だけお店を開けてあとは閉めていました。売りたいでも買いたくても何も無かったので

す。砂糖、塩、醤油も配給で、お菓子など勿論ありません。日本中の人が戦争に勝つために我慢しました。

配給だけではやっていけないので、農家にお芋（米のかわりに食べるため。今の様においしいお芋ではなく、味は悪くても大きくできる品種でした）や野菜を買い出しに行かなければなりません。買い出しに行ける人がいなかったり、闇の品物（配給以外の物）を買い出すことは法律で禁じられていたので、それを正直に守り、配給以外のものを買わないで餓死した人がいました。

一方農家は、作物を皆供出して配給品にしなければならぬので、個人に売ってはいけなかったのです。それをやると売ってもらっても警察官に見つかると、買ってきたものも皆取りあげられてしまうのです。それでも食べるものが無いので行かねばなりません。

そんな時に義父が肋膜炎ろくまくという病気になって、栄養のある物を食べさせなければならぬので、おばあちゃんは田無という所の農家に、時々畑の手伝いに行くことを約束して売ってもら

ことにしました。そのために今までしたことの無い畑仕事を手伝い、一生懸命働きました。一日で懲りて来ないかと思ったと、次に行った時いわれました。辛くても、お芋や野菜が欲しいので行きました。

昭和二〇年四月の或る日、田無駅を出たら空襲警報のサイレンが鳴りました。田無には中島製作所という飛行機を作っている工場があったので、敵機に空襲されたのです。私は駅を出て畑の細い道を一目散に走りました。敵機を目掛けて高射砲が打ち出されたので、とても恐ろしかったです。

見渡す限りの畑には誰もいないし、敵機を逃れて夢中で走って農家の軒へ入り、ホットしたのを今でもありありと覚えています。その家では、おじいさんが入口の椅子に掛けていたので、防空頭巾（今の防災頭巾と同じ）をとって「今日は」とお辞儀をしたとたんに、もの凄い轟音と共にあたり一面が土煙で真暗になりました。煙がおさまり、あたりを見たら、おじいさんに爆弾の破片があたって、肩の傷口から血が流れていました。農家のおじいさんはお父さんの怪我を見て泣いていました。

私はとっさに脱脂綿をあてがひ、布でしばらく、リヤカーで病院に早く連れて行く様になりました。こうしたことも他人だつたから、冷静に処置出来たのだと思います。あとで、家の中に入ってみると、あちこちに爆弾の破片が突き刺さっており、自分に当たらなかったのが不思議でした。畳の上には二、三cm位の

厚さに一面に泥が積もっていました。それから農家のおばさんとの掃除が大変で、夜になってしまいました。

家では、私が空襲でどうかあったのではと、年寄り二人で心配しておりました。後で聞いたのですが、爆弾の大きさは二百トンだったそうで、庭の大木の向う側に落ちたのでまだよかったです。こちら側だったらもつと大変な被害だったでしょう。私が今こうして生きていられるのも大木のお蔭です。その大木は裂けて無残な姿でした。これは私が二三歳の時の一番物凄い経験です。

私の家の回りは幸い焼夷弾が落ちなかったので、火災をまぬがれましたが、三月十日と五月二五日の大空襲の時には、都心一帯が猛火に包まれ、空が真赤に反射して、この辺りでも昼のような明るさになりました。高円寺、阿佐ヶ谷が焼夷弾で焼けた時には、煙がこの辺りまで襲ってきて目が痛くなりました。焼夷弾が落ちてくる時は、空中で破裂して火の玉が雨の様にザーと音をたてて落ちてきます。

都立家政の学校に落とされた時は、今夜は家も駄目かと思いましたが、B29という米国の飛行機が爆撃に来たのですが、ゴワングワンと独特の音がありました。そのほか低空に下りてきて機銃掃射をされたこともありましたが。どこの家も庭などに防空壕を掘って警戒警報が鳴ると壕に入ります。うちでは年寄りと一緒に私でもとても壕が作れないので、押入の上段と前に布団を積ん

で、その下へ両親に入ってもらいました。そうすると爆弾の破片が飛んできて布団にささって避けられるからです。勿論、家に直撃弾が落ちたらどうしようもありません。

戦争があると、会社にお勤めの人も、お店の人も、召集令状で軍隊に入り、戦場に行かねばならなかったし、男の人を送り出した後は、「銃後の守り」と言つて兵隊さん達に心配をかけない様に家を守ったのです。

空襲がはげしくなってきたので、両親は北海道に疎開することになりました。疎開するには区役所で許可をうける手続きをしなければなりませんでした。その順番を待つのに二日間区役所の前に並んで待ちました。次に汽車の切符を買わねばなりません。高円寺駅に今度は並びました。幾日駅前でも並んでいたかわすれましたが、三、四日は毛布にくるまって過ごしました。高円寺駅の回りは全部焼けて、早稲田通りからポツンと駅舎だけが見えました。その荒涼とした駅舎の前に、何十人も昼も夜も並んでまつのです。そのうちお互いに大変だから、ノートに到着順に名前を書いて当番をきめ、番をすることにしました。番にあたるると夜中でも家を出て駅に行き、又夜中に帰る時もありました。外燈もない暗い道だったので、提灯を持って歩きました。私の帰りが遅いと心配して見に来た義母が、道に提灯が破れて落ちていたと泣いて心配していたこともありましたが、それは私ではなかったのです。とにかく一週間位かかって漸

く切符を手にした時は嬉しく安心しました。

北海道までの汽車の旅も、今のあなた達には想像出来ない旅です。夕方四時、上野駅を出発、青森駅に翌朝六時頃着いて、それから青函連絡船に四時間ゆられ、更に函館から又汽車で翌日昼近くに帯広に着くのです。汽車の中は通路までぎっしり座っていて、トイレにもなかなか行けない状態です。でも一つ面白いことがありました。義父の大切にしていた柱時計を網棚に上げておいたのが、どうして動き出したのか、ボンボンと鳴り出したのです。とたんに車中の人が大笑い。それまで殺伐としていた車内が一時明るい話声になりました。

そんな苦勞をして両親を送りとどけることが出来たので、おじいちゃんが入隊する時に「両親を頼む」といわれた責任が果たせたのでホッとしました。

北海道の皆は、危険な東京へかえることを心配して引きとめてくれましたが、おじいちゃんがいる旭川の連隊へ面会に行き、家が心配なので東京へ帰って来ました。

そして間もなく広島と長崎に原爆が落されてからは、B 29の音がすると、これで最後かと思つたものです。

思い出しながら書いたのですが、こんなことで千尋ちゃん役にたつたかしら。ともかく戦争のない日本のためにどうしたらよいか、お友達とも話し合ってくださいね。

祖母より。